

日本海スルメイカ漁場調査

(抄 録)

大 川 光 則 ・ 黄金崎 栄 一

1998年4月～12月に試験船東奥丸（140トン）でスルメイカの漁場調査を実施した。

沿岸域におけるスルメイカ

1998年の本県日本海沿岸に来遊したスルメイカは、例年並の5月22日に三厩で初水揚げがあり、漁期始めの6月中旬までは好不漁の波はあったものの、前年並の漁獲量であった。しかし、その後漁獲量は伸び悩み、99年1月までの日本海主要4港（深浦・鯨ヶ沢・下前・小泊）の総漁獲量は3,128トンと、前年の約42.6%に留まった。

1989年頃から日本海のスルメイカの漁獲量は増加傾向となり、それ以降の資源水準は高位水準とされ漁獲量は約11万トン～17万トンの範囲で推移してきたが、1998年の漁獲量は約10万トンに落ち込んだ。沿岸域の漁獲量も日本海主要港の水揚げは（下水スルメイカのみ）1996年をピークに2年連続した落ち込み、98年の日本海主要港の水揚げ総計は76,280トンで前年の70.0%と漁獲量が落ち込んでいる。

本県沿岸域の漁獲量が、日本海沿岸域全体の漁獲量より落ち込みが大きかった原因としては、水温の上昇が例年より早く、沖合のほうが昇温が早かったこと等が考えられ、このことから沿岸域（佐渡以北の沿岸域）に来遊するスルメイカの資源が少なかったものと考えられる。

津軽海峡の大畑でも、98年の漁獲量は1,490トンで前年の30%に留まっており、日本海来遊群及び太平洋来遊群の落ち込みが原因となり漁獲量が減少した。

沖合域におけるスルメイカ

本県における日本海沖合のスルメイカの水揚げは、中型凍結船による八戸港への水揚げ（一部太平洋の水揚げ含む）で、98年漁期（7月～翌年4月）までの水揚げ量は13,598トンとなっており、前年同時期の水揚げと比較すると43.9%（水揚量30,942トン）となっている。

中型船の漁獲量の落ち込みは、日本海の資源水準の落ち込みもあると考えられるが、漁期始めの5月からほとんどの中型船がアカイカ漁場に展開したことも漁獲量減の要因になっていると考えられる。

発表誌

平成10年度イカ釣漁場開発調査資料24号（平成11年5月）

平成10年度外洋性イカ（スルメイカ・アカイカ）に関する生物測定・標識放流・海洋観測結果基礎資料集（平成11年5月）青森県水産試験場